1月合評会乾燥

神崎裕子

* イコ：五月の同行

この作品は読んでいて辛くなる。それは理由があるのだろうが後述する。この小説は小説という形を借りた一種の反抗と受け取った。「なんだってそうだけど……刹那的な生産物」そういったものを避けたい。できることならそれに当てはまらずに生活したい。といった思いを感じる。ロックミュージックという一種反抗的音楽に韓流という画一化されたものが割り込む。イオンという画一化された店で買い物をする。画一化されていく自分に対する反抗。最後の場面車列、から車の塊という画一化されたものから中身はロックミュージックという反抗に満たされる。表面こそ画一化されているが中身は違う。

さてなぜ辛くなったかであるがこれは一般的な大衆社会を描いたものとして画一化されてしまった自分が確実に存在するからだ。私はそのことを認めたがらない人種であるからだ。

* 甲斐　寛樹：スイッチ

スイッチ。ＯＮ・ＯＦＦの切り替えを描いたものである。主人公は最終的に性交を行ったように思われる。この作品は、ライトノベルとして読むべきだろうか。私にはよくわからなかった。この作品はよくわからない。何度読んでもよくわからなかった。人生経験が少ないせいだろうか。

* しろくま：リセット

この作品は個人的にかなり好きだ。あり得ないような制度が施行されたら。の思考実験。ややもの足りない気がするが枚数から言って仕方ないと思われる。

* 6：明け方の焔

日本神話のカグツチが出てくるがこいつを出すにはやや結びつきが弱いように思えた。また楽曲等を具体的に書いているが利点があまり見えなかった。

* 小野寺：いざ起て戦人よ

喧嘩という些細な暴力から核爆弾という理不尽な暴力に絡めていく。暴力に」大して反対している主人公がいざ起て戦人よを歌うという行動。面白い。

* 緑川：目覚め

幽霊なのだろうか、それとももっと別の存在であろうか、と想像しながら次の行へ、次のページへと目が移る。語り手は誰と疑問を残しながら。個人的には好きである。

* 常磐　誠；劣情に惑う剣

恋にまどう若い青年の剣道を通じた話だが、私は共感できなかった。単に似たような思いもしたことがないのもあるだろうが、どこかリアリティーがかけているように感じた。